



TITLE:

# 「平穏な青年期」を生きる青年の諸相

AUTHOR(S):

杉原, 保史

---

CITATION:

杉原, 保史. 「平穏な青年期」を生きる青年の諸相. 京都大学カウンセリングセンター紀要 2001, 30: 23-36: 30009.

ISSUE DATE:

2001-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/156320>

RIGHT:

# 「平穏な青年期」を生きる青年の諸相

杉 原 保 史\*

## 1. はじめに

青年期は、古典的には「疾風怒濤」の時期、すなわち反抗、混乱、不適應などを呈しがちな発達上の時期と見なされてきた。現代においても、青年期は「難しい年頃」であり、「青少年問題」は社会の重要な関心事であって、青年期は大きな危機を孕んだ人生の節目であるという見方はかなり浸透したものである。しかしながら一方で、1960年代後半から、そのような古典的な青年像は現代の多くの青年の実状を反映するものではないのではないかという疑問が提出され、多くの青年が目立った反抗、混乱、不適應を示すことなく、まったく適応的・順応的にこの時期を過ごしているという調査結果が報告されてきた。

これらの異なった二つの青年観には、それぞれ「青年期危機説」と「青年期平穏説」というラベルがしばしば与えられてきた。しかし、このようなラベルは、青年期の理解を促進することに果たして寄与してきたであろうか。本稿は、まずこの二つのラベルの影響について検討する。その上で、れら二つのラベルをともに拒否した地点に立脚し、そこから、青年期を「平穏に」過ごす青年たちについて考察することとしたい。

## 2. 青年期危機説ならびに青年期平穏説とラベルされている諸研究

まず、青年期危機説と青年期平穏説という二つのラベルのもとにある諸研究を簡単に見ておこう。なお以下の記述においては、村瀬（1976）を参考にしたことをお断りしておく。

青年心理学者Hall（1904）の「疾風怒濤」、精神医学者Kretschmer（1949）の「思春期危機」、これらはともに青年期の不安定さを指摘した古典的な記述である。以来、様々な著者たちが青年期を反抗、混乱、不適應の時期として記述してきた。

それが最も明瞭なのは、A.FreudやBlosといった自我心理学の立場からの青年研究であり、ここでは青年期は精神病理にかなり接近する極めて不安定な時期として描かれている。たとえばA.Freud（1958）は、「青年期は、本質的に平和な成長が阻止される時期であり、かつ青年期の過程において安定した平衡状態が保たれているとしたらそのこと自体が異常である」とか、「青年期の現象は、神経症的、精神病的あるいは非社会的な症状形成と類似しており、境界線状態

---

\* 京都大学カウンセリングセンター

ともほとんど見分けがつかない」などと述べている。

青年期危機説は、こうした青年観に対して与えられてきたラベルである。冒頭において触れたように、このような青年観は古典的なものであると同時に、現代においても有力かつ一般的なものである。そのことは、こうしたイメージに合わないような青年（現代の多くの一般的な青年）が「青年らしくない」と評されることによって、しばしば明らかになる。

一方で、本当に青年期はこのように反抗、混乱、不適応の時期なのだろうか、こうした青年観は現代の青年の実状を正しく反映しているものなのだろうか、という疑問が提出されてきた。そして、実際に青年に面接調査を施すことによって、この疑問に答えようとする研究がなされてきた。

DouvanとAdelson（1966）は、全米にわたる高校生を母集団として標本抽出された3000人あまりの男女を対象として面接調査を行った。その結果、これらの高校生は、おおむね、異常、葛藤、混乱、危機といった言葉とはほとんど無縁の、保守的で落ち着いた無難な生活を営んでいるということが明らかになった。

OfferとSabshin（1969）は、106人の男子青年を対象として3年間にわたる縦断的な面接調査を行った。この106人は、326人の男子高校生の中から、10の尺度からなる質問紙の9つ以上の尺度で平均から1標準偏差以内の得点を示すことを基準として選ばれた中庸群である。主な結果は、このうちで慢性非行や顕著な性格の歪みを含むある程度以上重篤な情緒的問題を示したのは10人に過ぎないということであった。OfferとSabshinは、こうした調査の結果から、精神分析的な著者たちがしばしば述べるような青年の精神障害への接近は標準的なものではないと主張し、「青年の混乱という臨床概念の妥当性についての疑義」を提出した。

OfferとOffer（1975）はその後もこの同じ青年たちの追跡調査をさらに4年間続け、青年期発達の主要な類型として連続的成長群、波乱成長群、激動的成長群の3つを挙げた。連続的成長群とされた23%の青年は、青年期を通じて人生の目標に際だった変化が見られず、意義深く満足のいく大人としての生活に向かって進歩しているとの内的確信が認められるような人たちである。彼らは、内面的・外面的な刺激にも常に安定した態度で効率的に対処することができおり、両親との関係も調和的で、心理療法やカウンセリングを受ける者は皆無であった。波乱成長群とされた35%の青年は、連続的成長群と同様に順応的ではあるのだが、より葛藤によって強く彩られた生活を送っている人たちである。「前進と退行の交替サイクル」（Blos, 1962）が顕著に認められ、通常 of 青年期の発達課題を解決できる力は備えているものの、近親者の死などのストレス状況に際しては柔軟な対応ができなくなりがちであった。両親との関係も葛藤や対立が目立ち、臨床的な症状を示した者も多かった。彼らはこの3つの類型の中では最も内省的ではなく、一応は順応的な青年期を過ごしつつあったものの、それは十分な自己吟味を伴うものではなかった。また彼らは抑制的なやり方で適応を維持しているとの印象を免れなかった。激動的成長群とされた21%の青年は、先のA. Freudのような記述がおおむね当てはまるような

人々である。家庭や学校で問題行動が目立つことが多く、自分自身についての疑惑を強く感じており、両親との間の葛藤も激しかった。

こうした結果から、OfferとOfferは、やはり青年期危機説の記述に当てはまるような青年は一部に過ぎないのであって、より多くの青年は目立った混乱を示すことなく成長してゆくのだと考えている。

この他にもこの時期の青年が精神障害に接近していると言えるほど混乱しているわけではなく、むしろ適応的であることを示すデータが、様々に報告されてきた。Herz (1960) は広範囲の青年にロールシャッハ・テストを施行し、被験者たちは総じて外界や内界への優れた順応力を持ち、効果的で社会的に適切な形で自分のエネルギーを方向づけることが出来ていると報告している。Ames (1971) もまた同じくロールシャッハ・テストを用い、12歳から16歳までの青年を縦断的に研究したが、そこでも同様の見解が報告されている。

こうした諸研究は、「青年期危機説」とラベルされてきたような諸研究の中で描き出されているような青年像は、虚像であるとはまでは言わないものの、少なくともこれらの研究がなされた時代・社会においてはとても標準的であるとは言えず、むしろ少数派であるかもしれないということを示している。こうした諸研究が、一般に「青年期平穏説」というラベルを与えられてきたものである。

### 3. 青年期危機説ならびに青年期平穏説というラベルがもたらした混乱

前節において見てきた諸研究は、しばしば青年期危機説と青年期平穏説というラベルの下に分類されてきたわけであるが、これらのラベルは青年期の心理学的探究にとって困難な状況をもたらしてきたというのが私の考えである。というのもこれらのラベルは、容易に対立的な概念と捉えられるような誘導性を帯びているために（そのようなアフォーダンスを備えているために）、人を「青年期危機説と青年期平穏説はどちらが正しいのか」「青年期は危機なのか平穏なのか」というような問いへと導きがちであるからである。そしてこうした問いは、何ら生産的な知見を生み出さないままに労力だけを消耗させる、出口のない迷路でしかないからである。

たとえば「青年期は危機的な時期なのか、それとも平穏な時期なのか」というような問いは、「人生は幸せですか、不幸ですか」という問いに似て、どのようにも答えようのない、失敗した問い、あるいは擬似的な問いである。このような問いについては何らかの意見表明はできても、それを論証することも反証することも、原理的に不可能である。このような問いに関わっている限り、青年の理解は少しも進まないであろう。

あるいはもう少し問いを明細化して、「青年期は、人生の他の時期と比べてとりわけ危機であるのか、それともむしろ平穏であるのか」という問いを立てたとしても、その問いは、白人と黒人はどちらの方が知能が高いかとか、男と女はどちらが幸せかというような問いと似て、やはり学問的水準に達しようような客観的な答えの出しようのないものと考えられる。しかしな

がら、多くの学術的な論文において、事実、このような議論がなされてきた。たとえば村瀬(1976)は「人生のどの時期にも危機が訪れる可能性があることは言うまでもないが、なんと言っても青年ほど、顕著な特徴を備えた独特な危機が生じ易い時期は他にないことも否定できないと思う」と述べている。通常、青年期が他の年代よりも危機的であるというこうした主張は、特定の精神障害の初発年齢が青年期にピークがあるとか、特定の行動的問題が青年期に多いというようなデータを「根拠」にしている。私はこうしたデータの有用性を否定するものではまったくない。しかし、このようなデータは、青年期が他の時期よりもより危機的であることの真の根拠とはなり得ないと考える。このような論法を受け入れれば、男性において中年期の自殺率は他の年代の自殺率よりも高いから、中年期は他の時期よりも危機的であるとか、老年期は死亡率が他のどの年代よりもはるかに高いから、老年期は他の年代よりも危機的であるという主張も同様に成り立つことになる。青年期は他の時期よりも危機的であるというこうした主張は、客観的・学問的な主張というよりは、青年期中心主義とでも言えるイデオロギーに基づく主張であって、青年にしばしば指摘される自己中心的な誇大性に対応する、研究者・治療者の逆転移的反応であり、不必要なものであるばかりか、発見的な思考を妨げるものであると考える。

以上のように、青年期危機説と青年期平穏説とを単純に対立的に捉え、青年期は危機か平穏かというように二者択一的に問う問いは、何ら生産的なものとはなりえないものだと考えられよう。これらのラベルはこうした問いへと方向づける抗いがたい誘導性を帯びているわけだが、多くの研究者がそこに捕らえられてしまったために、この領域における思索の発展が相当に阻害されてきたと思われる。(注1)(注2)

#### 4. 「平穏な青年期」をどう捉えるか

以上述べてきたことは、青年期危機説と青年期平穏説という2つのラベルに導かれた「青年期は危機か平穏か」といった種類の問いを拒否しようとするものであって、青年期危機説や青年期平穏説のラベルの下にある諸研究をすべて否定するものでは決してない。以下においては、これまでに述べられたような立場から、青年期について、特に「平穏」な青年期について考察してみたい。

DouvanとAdelsonの研究やOfferとSabshinの研究は、多くの青年が、少なくとも面接調査によって明らかになるレベルでは、目立った苦悩、逸脱、反抗、不適応を示すことなく、かなり適応的・順応的に青年期を送っていることを示したものである。こうした青年の存在は、彼らの研究の影響も手伝って、現在では広く認められている。むしろ、ここ数十年の間、そうした青年の数が増大しているという印象が様々な語られてきた。大学においては、体制に反発する運動家は激減し、講義への出席率は高くなり、自転車置き場と食堂の混雑が問題となってきた経緯がある。

こうした一群の適応的な青年たちの存在を認めることに關してはもはや異議はないとして、次に問題になるのは、彼らをどう捉えればよいのだろうか、ということである。

Douvan, Adelson, Offer, Sabshinらといった著者たちは、こうした青年たちは文字通り適応的・順応的なのであって、特に問題はなく、特別の援助の必要もないと考えている。これに対して、清水（1976）や村瀬（1976）といった著者たちは異なる意見を述べている。これらの意見を検討してみよう。

清水（1976）は、青年期は危機的な時期であるという考えを臨床事例を引きながら描き出した上で、青年期平穏説に触れ、「自分の置かれている状況に抵抗なく易々諾々と順応することが、果たして自己を確立せんとしている青年にとって、健全な姿であるのかという問いが生じてくるのである。…己れの置かれた状況に抵抗なしに順応すること自体が病的なものに見える」と述べている。

こうした見解は特に珍しいものではなく、適応的・順応的な青年についてしばしば表明される、むしろ一般的な見解であると思われる。私には、こうした見解は、青年期は危機的なものであって、それ以外ではあつてはならないという前提を無批判に保持しようとするもの、いわば青年期「危機」中心主義的イデオロギーの現れ、のように見える。そしてその背後には、こうした適応的・順応的な青年たちに対する苛立ちのような感情が垣間見えるような印象を受ける。

私の見方は不当に歪曲されているかもしれないが、しかしあえて述べるなら、しばしば聞かれるこうした意見は、適応的・順応的な青年を病的だと言いながら、その病気に対して治療的・援助的に関わろうとするニュアンスに欠け、むしろ彼らに対して否定的・拒否的であるように感じられるのである。こういう意見を述べる人たちは、苦悩し、逸脱し、反抗する青年を好ましく感じ、そういう青年に対しては治療的・援助的に関わろうとしているのであろうが、適応的・順応的な青年に対しては単に「病的だ」と、否定的なラベルづけをしているだけのようと思われる。

このような問題はあるものの、表面的な適応性をもって健全さであるとする考えの限界を指摘した点では、清水の見解は重要な示唆を含んでいると思われる。ただし、だからと言って逆に、表面的な適応性をもって、即、不健全さであるとしてしまうことには私は賛同できない。これは単に問題を逆転させたに過ぎないからである。

また、村瀬（1976）は青年期の危機と言われているものは実存的な次元のものであり、それを調査で問われているような意識的な自己認知と単純に関連づけることには無理があるとした上で、「危機を自覚しない青年たちも、無意識的過程ではかなり危機的な状況を経験しているらしいことは、青年の夢や空想生活などから推測できるところである。彼らにおいては、危機が顕在化しないうちに処理されてしまうように思われる。エリクソンのいう小成群（早期完了群）において、無意識的にも危機が存在しないと言えるかどうかは、現在までの研究では明らかに

されていない」と述べている。

村瀬は、先の清水よりも慎重で客観的な態度を取り、危機が存在しない可能性も含めた上で、一見したところ適応的・順応的な姿を呈している青年も、多くは、無意識的には危機を経験しているのではないかという意見を述べているわけである。ここで村瀬が、「表面的には適応的でも、潜在的・無意識的には危機的である」という表現を許容するところまで危機概念を拡張していることに注意すべきであろう。村瀬は、青年期危機を否定するDouvanとAdelson、ならびにOfferとSabshinによる調査の結果を尊重し、それと矛盾しないようなやり方で危機概念を用いることによって、青年期危機の概念を生き延びさせようとしているように見える。

潜在的・無意識的な危機という概念は、論理的にはどこまでいっても反証できないものとなっていく危険性を孕んだ概念である。その点には注意が必要であるが、表面的な適応性の背後にきめ細かく注目してゆく必要性についての村瀬の指摘には、やはり聴くべきものがあると思われる。

こうした議論を踏まえ、この問題に関して、以下のような考えを提示したい。

少なくとも一見したところでは「平穏な」青年期を過ごす一群の青年が存在している。これは否定しようのない事実である。調査を行ったDouvan, Adelson, Offer, Sabshinらは、こうした青年たちを文字通り何ら問題のないものと考えているが、そう断定するのは尚早であるように思われる。表面上問題のないことが必ずしも真に健康で生き生きとした状態を反映しているとは限らないということは、一般に心理力動論が明らかにしてきたところである。村瀬の述べるように、潜在的には動揺がある可能性は否定できず、こうした青年たちの発達を促進するためには彼らの状態に適合した援助が必要であるかもしれない。

## 5. アイデンティティ・ステイタスにおける早期完了型

以上のような考察を踏まえて、以下においては、目立った苦悩、反抗、不適応などを示すことなく適応的・順応的に青年期を生きている青年たちについてさらに考察してみたい。それに当たっては、Marcia (1966) のアイデンティティ・ステイタスについての研究が一つの足がかりとなる。

Marciaは、青年期に関するEriksonの理論をある程度実証的に研究する試みとして、青年のアイデンティティの様態を調べる半構造化された面接を定式化し、その様態に関して4つの類型を導入した。すなわち、アイデンティティ達成型、モラトリアム型、早期完了型、拡散型である。個人がどの類型に当てはまるかは、危機の経験（ここでの危機というのは真剣に迷ったり悩んだりすることを指している）とコミットメントの有無という二つの基準によって評価される。すなわち、危機を経験した上で何かへのコミットメントをつかみ取った人々がアイデンティティ達成型であり、現在まさに危機のさなかにあってコミットメントを模索しているのがモラトリアム型であり、危機を経験することなくコミットメントを表明するのが早期完了型であ

り、コミットメントの獲得やそれに向けての努力に失敗しているのが拡散型である。

このうち、本稿のテーマとの関連が最も深いのが、早期完了型である。というのも、この型の青年は、深く思い悩んだり動揺したりする経験がほとんどないままに、適応的・順応的に青年期を送っているように見えるからである。そこで早期完了型について、もう少し詳しく、検討してみよう。そして、この型の青年がどのような困難を抱えているのか、あるいは抱えていないのかを考察するための基礎としたい。

彼らは、危機を経験せず、コミットメントを表明する。その価値観、政治的スタンス、職業決定などは、主体的な検討を経ることなく両親のそれを基本的にそのまま引き継いだものである。調査によってばらつきはあるものの、大学生のおおよそ4分の1が早期完了型と評定されている。この数字は、OfferとOfferの調査における連続的成長群の23%という数字とほぼ一致する。Marciaの早期完了型とOfferとOfferの連続的成長群とは、それぞれ異なった背景から出てきた概念であるが、内容的にはよく似ており、そう判定される青年の比率が両者でほぼ一致しているというのは興味深いことである。

早期完了型の青年の記述的な特徴としては、質問紙法を中心とした様々な調査で、権威主義的傾向が強い、社会的承認への欲求が高い、自律性が低い、自分の人生における決断の際に家族に相談することが最も多い、などのことが見出されている（宮下他，1984）。

しかし、早期完了型をめぐる議論の中でも最も重要なものは、彼らが文字通り適応的であって、何ら困難を抱えておらず、順調に発達・成長していきつつある存在なのか、それとも一見したところの彼らの適応的なあり方は防衛的なものであり、何らかの工夫された介入が望まれる存在なのか、という点に関するものであろう。ここでもまた我々は、早期完了型と判定された一群の青年に特化された形で、先述の青年期危機説と青年期平穏説の間の議論とパラレルな議論に出会うことになる。

Marcia (1966) によれば、早期完了型は「パーソナリティにある種の硬さがあるのが特徴的である。もし彼が両親の価値観が通用しない状況に置かれたならば、極度に脅かされるだろうと思われる」とされており、またMarcia (1967) には、環境の変化が拡散状態を突然引き起こすかもしれないと述べられている。このように、Marciaは早期完了型をまったく順調な発達・成長の過程にあるとは見なしておらず、むしろ潜在的な拡散傾向を抱えているものと見なしている。

ところが、アイデンティティ・ステータス面接の日本語版を作成した無藤 (1979) は、早期完了型について「本研究では大部分の早期完了にはそのような危うさ・硬さはなく、今後也要領よく生きていくだろうと予想された点が印象的である」、「目立った危機を経ずに成長していく青年も多いことが示唆される」と述べており、これらの青年は彼らなりの成長の過程にあるのであって、ことさらに援助の必要性は認められないと考えているようである。

こうした議論を受けて、杉原 (1988) は、そもそも早期完了型について潜在的な拡散傾向が



あるとかないとかといったことが論じられながらも、そのような内容については何も言えないような一回限りの面接や質問紙による調査しかなされてきていないことが問題であると指摘した。そして、早期完了型と評定されたある男子大学生に対して3回にわたる面接調査（複数の心理テストを含む）を施行し、その青年のアイデンティティの様態について事例研究を行った。そこに描かれた青年は、ロールシャッハ・テストの結果をはじめとして、得られたデータを総合的に評すれば、あまり豊かで生き生きとした印象を与えず、むしろ潜在的には拡散的な傾向が示唆されるような青年であった。杉原のこの研究は、早期完了型と判定される青年をすべて、それだけで、何の問題もない健康青年と見なしてしまうのは誤りであり、そう判定される青年の中には、少なくとも一部、潜在的な拡散傾向への防衛として強くコミットメントを表明するような者も含まれている可能性が現実にあることを例証したものである。

しかしながら、こうした知見は、早期完了型と判定される青年がすべて潜在的に拡散傾向を抱えているということを示唆するものではない。むしろ、早期完了型は同質性をもった単一のカテゴリーではなく、アイデンティティの様態に関して重要な点で異なった青年たちを含むものではないかという考えも十分検討に値するものであろう。実際、早期完了型の中に下位カテゴリーを設けることが、様々な著者によって提唱されてきた。

Marcia (1976) はアイデンティティ・ステータスの調査にかつて参加した青年の6年後の再調査において、それまでに定式化されていた4つのステータスに加えて、「早期完了/拡散型」という新しいステータスを導入した。これは正確に言えば早期完了型の下位カテゴリーではなく、5つ目のカテゴリーであるが、早期完了型とされていたものの一部が含まれ、関連が深いのでここで取り上げておきたい。このカテゴリーの青年は、早期完了型のように堅くもろい強さを備えていなければ、拡散型のように方向性が無くても無頓着というわけでもなかった。すなわち、達成型や早期完了型のような強いコミットメントを表明するわけではないが、一応のコミットメントは表明するわけである。このカテゴリーには、失敗した早期完了型と、早期完了型になろうとして親から投げかけられたものにしがみついている拡散型とが含まれるという。

Kroger (1995) は、Berzonsky (1985) によって提案された「硬い早期完了型 firm foreclosure」と「発達的な早期完了型 developmental foreclosure」の二つの下位カテゴリーについて検討している。Krogerによれば、硬い早期完了型は、変化に対して抵抗を示すような取り入れられた両親像によって支配されており、内在化されたそうした対象との間の絆を弛めることに伴う分離不安や呑み込まれ不安を避けようとする心理動機が認められる青年たちである。これに対して発達的な早期完了型は、早期完了型と判定される状態を示してはいるが、そうした感情や防衛にとらえられているわけではなく、将来において現在コミットしてるのとは違う選択肢を考慮する必要性が生じた場合には柔軟に対応できると考えられる青年たちである。

ArcherとWaterman (1990) は、早期完了型に5つの下位カテゴリーを提唱している（表1）。ここには、様々な特徴をもった早期完了型のヴァリエーションが描かれており、興味深い。

表1. 早期完了型の5つの下位カテゴリー (Archer&amp;Waterman; 1990)

<p><b>オープンな早期完了型</b> open foreclosure</p> <p>他の可能性を検討することなくある特定の価値や目標にコミットしているけれども、他の可能性に対しても防衛的ではなく、もし将来他の可能性を検討するのが適切になれば、すんなりとモラトリアム型へと移行するだろうと見なされる。</p>
<p><b>閉ざされた早期完了型</b> closed foreclosure</p> <p>この型の青年は、自らコミットする価値や目標を理想化されたやり方で表現しがちであり、それとは相容れない他の価値や目標に対して防衛的に反応することを特徴としている。彼らは独善的で柔軟性に欠け、不寛容である。彼らのコミットしている価値や目標は、重要な他者の好みと調和したものであり、彼らは重要な他者の好みに反するとその愛情を失ったり罰されたりするのではないかという不安を抱えている。また彼らは、たとえ自らのコミットする価値や目標が揺るがされ探究的な活動が適切な状況においても、探究をしようとはしない。</p>
<p><b>早期に形成された早期完了型</b> premature foreclosure</p> <p>この型の青年は、しばしば学童期といった非常に早い段階でコミットメントを形成する。彼らの選択は、子供時代における親、教師、本の登場人物などからの強い影響に基づくものである。彼らは自分がそうしたモデルと似ていると思っており、人生をロマンティックに捉え、モデルを過大評価する。そして彼らは青年期に入っても、他の選択肢を実験的に検討しようとはしない。</p>
<p><b>遅れて発達してきた早期完了型</b> late developing foreclosure</p> <p>この型の青年は、成人期の初期に至るまで拡散した状態にあり、いよいよ成人期となって最初の身近な選択肢にコミットするようになったものである。彼らは、他の選択肢を探索することなく、居心地がよく、可能で、適切で、便利に見える価値や目標を受け入れる。彼らは、人生に方向性や目的や意味を与えてくれるような経験をかつて持ったことがなかったのかもしれない。人生のこの時期になってやっとそうした経験の機会が現われたのである。</p>
<p><b>全体主義的な早期完了型</b> appropriated foreclosure</p> <p>この型の青年は、誰かの決めたものや、あるいはどこかの集団の決めたものを自分のものとしてまもっているという特徴を持つ。宗教的カルトや政治的・社会的な急進的グループへの入会において起こりがちである。彼らは、これまでの自分自身の経験とは異なった生き方を、無批判に丸ごと受容している。</p>

これらの様々な下位カテゴリーを提唱する諸研究は、早期完了型と判定される青年も、その背景を調べていくと、そこにはかなりのヴァリエーションがあり、比較的柔軟で健康な印象を与える青年もあれば、かなり防衛的で問題を感じさせる青年もある、ということを示唆している。言い換えれば、これらの研究は、取り立てて目立った悩みや迷いや不適応などを示すことなく青年期を適応的・順応的に過ごしているように見える青年を、そう簡単にひとくくりにして捉えるべきでないことを示唆している。青年期をひとくくりにして危機か平穏かと問うことの不毛性は前に論じたが、ここで紹介したような現在のアイデンティティ・ステータスの研究は、青年の中には、表明されたレベルで混乱や動揺の経験が認められる者もあれば認められない者もあるということ、そしてまた、表明されたレベルで混乱や動揺が認められない者のみに関して見ても、その背景に推測されうる心理力動には多様なものがあること、を認めるものである。これは、結局のところ、いろいろな青年がいるのであって単純なことは言えないという当たり前のことを述べているようでもあるが、これまで述べてきたような青年研究の文脈からすれば、このように当たり前の感覚と矛盾せず、なおかつ学問的な探究の道具として耐えうる概念が発展させられてきたことは、高く評価されるべきものであろう。

いずれにせよ、アイデンティティ・ステータスの研究者の間では、一般に早期完了型はアイデンティティ拡散型と並んで、発達の低いステータス、あるいは健康度において低いステータスとされている。そして、低いステータスから高いステータスへの移行をどのように援助するかということが、一つの研究テーマとなってきた (Archer, 1989)。これは重要かつ必要な研究テーマであるが、同時にまたかなり困難な研究テーマでもあり、研究の数はまだ少ないのが実状である。

## 7. 結びにかえて「平穏な」青年期の時代

以上、個々の青年の示す像を冷静かつ詳細に見ていくことの必要性を強調し、様々な研究もたらす知見を検討してきた。最後に、視点を変えて社会的・歴史的な文脈から青年像を見てみよう。青年期は、社会的・歴史的な文脈を抜きに理解することのできないものだからである。これまでの考察は、以下のような考察と統合されて初めて、十全なものとなるべきものである。

これまでも幾度か触れたように、現代は青年期を一見「平穏に」過ごす青年が相対的に増大した時代であり、このことは青年期の研究者を戸惑わせてきた。しかし一方で、青年期の心理現象はその社会の文脈によって大きく規定されるものであることがよく知られており、たとえばMead (1928) の古典的な文化人類学的な青年研究は、サモア島の伝統的な社会システムにおいては青年期は平穏であることを報告してきた。そのため研究者の中には、現代の我々の社会を、当時のサモア島の社会になぞらえ、両者を同等視することによって、現代の我々の社会における青年の「平穏」を説明しようとするような言説も時に見受けられる。しかし果たしてそのような主張は当を得たことなのであろうか。

我々の社会におけるここ数十年間の青年像の変遷の中でも最も目立ったのは、1960年代から70年代にかけての学生紛争であろう。これは、東西冷戦下でますます強大化する国家主義的傾向や、経済優先の大量生産・大量消費的な産業社会に異議を唱え、これとは違った新しい社会を作り出そうとする青年の真剣な努力を中核とするものであった。しかしこの努力は結果的には敗れ去り、挫折に終わった。

現在の我々の社会は、この闘争で勝利した勢力が発展したもので、大量のエネルギー消費を伴い、致命的な環境破壊を前提とした大量生産・大量消費社会である。そのシステムの中で、青年は、流行に敏感な最重要消費者と位置づけられ、大きな役割を果たすようになってきた。青年たちは安定して社会構造の中に取り込まれているように見え、このことは青年期の「平穏さ」を支える社会的背景となっているようにも見える。

しかし、一方でオウム真理教による無差別大量殺人事件や、神戸のサカキバラ少年による猟奇的連続殺人事件など、青年あるいは青少年の引き起こす事件はますます常識では理解しがたいものとなってきた。そして、これらの事件に同情と共感を覚える青年はかなりの数に上ると推測されている（こうした事件に同情・共感するということは、こうした事件を引き起こす可能性が高いとか、こうした事件を肯定するということを必ずしも意味しない）。これらの現象は、一見すると適合的に社会に取り込まれているように見える現代の青年たちにおいて、この社会に積極的にコミットできない心理が潜在的にかなり浸透していることを示している。伝統的なサモア島の社会ではこんなことは見られなかったのではなかろうか。

ところで河合（1994）は、いずれも青年を主人公とした小説である、夏目漱石の『三四郎』と村上春樹の『羊をめぐる冒険』とを対比させることで、現代の青年像を描き出そうと試み、以下のように述べている。

『羊をめぐる冒険』に出てくる主人公の「僕」が会った羊は、三四郎の場合とまったく次元を異にしている。それは「羊男」であり、そもそも人間か羊か、この世のものかあの世のものかでさえ定かでなかった。美禰子も三四郎にとって謎であったが、「僕」にとっての羊男に感じる謎は、もっと次元が異なるものがあつた。現代の青年が直面させられる「現実」は、三四郎にとって「最も深厚な」と考えられた世界を超えている。

確かにこの二つの小説を読み比べてみれば、『三四郎』における主人公の描写は、赤面するような当惑や、心細さやつっぱりなど、生々しい感情の揺れを感じさせるのに対し、『羊をめぐる冒険』における主人公の描写は、そのような生々しさを感じさせず、もっとあっさりしている（「平穏」である）。しかしながら、羊男というような非常に不可解な存在と出会わねばならないし、結末もかなり破壊的なものである。

このことは、一見すると消費社会に快適に取り込まれているようでありながら、一方ではど

こか遠いところに、この社会を根底から破壊してしまいたいという衝動のうごめきを感じさせる、前述の現代青年像とも一致する。

このような観点からしても、「平穏な」青年期はそう単純に捉えられてよいものではないということが分かる。そして、その「平穏さ」をより深く理解するためには、青年にアプローチする我々自身が、我々の社会の歴史と現状について洞察を深め、問題意識を高めること、すなわち、青年が真に積極的にコミットできるような社会（産業や教育や地域社会や家庭のあり方）のヴィジョンを模索すること、が要求されるということも。そうでなければ、我々の目に青年は単に「平穏」と映り、突発的に発生する理解不能な異様な事件に驚かされるだけとなることであろう。

### 注釈

（注1） 青年心理学の代表的な研究者である西平（1988）は『青年心理学ハンドブック』の冒頭を飾る論考を「青年が『青年らしさ』を喪失した時代に青年心理学は成立するか？」という問いを掲げることから始めている。このような問いは、青年期心理学における彼の閉塞感を如実に示すものであろう。西平はここでの「青年らしさ」について、「反抗的であり、羞恥心が強く、純情で感傷的で、素直さと攻撃性の両面をもっており、未来に夢と不安を抱き、自我感情が拡大したり萎縮したり大きく動揺し、ロマンチストで空想家であり、根本的に反保守的な理想主義的傾向を持って生きていく」などの特性群を指すものであると説明している。これは青年期危機説の示唆する青年像とおおむね重なるものである。西平にとって青年心理学とはすなわち青年期危機説に基づいた心理学を意味するものではなかったかと私には思われ、その線に沿って考えると、先の西平の問いは「青年期が平穏であるならば、青年期危機は一体どうなるのか」という問いと通じるものなのではないかと推測される。このような問いを追究している限り閉塞感に陥らざるを得ないのであり、このような問いを追究する代わりに、このような問いをいかに拒否するかを追究することが本稿の目的の一つである。

（注2） 上述のことと関連することだが、青年期についての心理学的な解説の中には、Eriksonを青年期危機説の代表者とし、そのライフ・サイクル理論におけるアイデンティティ対アイデンティティ拡散の危機を青年期危機説の代表と見なすような記載が見受けられることがある。確かに、Eriksonは青年期を決して平穏な時期であるとは考えていたわけではなく、彼の著作の中には、A.FreudやBlosと同様に青年期を精神病理に接近する不安定な時期と見なす記述が認められるのであり、その意味で彼を青年期危機説に立つものと見なすことは間違いとは言えない。しかし、Eriksonのライフ・サイクル理論における「危機」というのは、生涯にわたる発達の各段階において避けようもなく要請される発達の課題を指したものであり、何も青年期だけが特別に危機的な時期であることを意味するものではない。Eriksonは、それら生涯にわたって要請される発達の变化的なそれぞれを、単に発達課題などという言葉ではなく、あえて「危機」という言葉で捉えたわけであるが、それは、発達の变化的な常態に輝かしい達成であると同時につらい喪失でもあり、発達の陰の面（不信、恥・疑惑、罪悪感、劣等感、役割拡散など）の体験なくして光の面（信頼、自律性、積極性、勤勉性、アイデンティティなど）の獲得はありえないという、発達の变化的なもつ力動的な内実を伝えようとしたためであろう。ともかく、Erikson理論における危機の概念は、いわゆる「青年期危機説」における「危機」とはまったく異なった種類の概念であると考えられる（鍾，1988）。

さらに言えば、Eriksonの理論において重視される概念に相互性がある。この概念は、親の世代にとって停滞を越えて生殖性を得られるかどうかという危機の解決は、親が関わる子供の世代が不信を越えて基本的信頼を得られるかどうか、恥・疑惑を越えて自律性を得られるかどうか、などの一

連の危機の解決と対応関係にあるということを示したものである。言い換えれば、親の世代の危機と子の世代の危機とは、両者の関係性の中において、ともに乗り越えられたり、乗り越えられなかったりする、ということである。つまりこの概念は、ライフ・サイクル上の危機の解決という次元においては、親の世代と子供の世代とは全く対等で相互的なものであるということ述べているものである。この相互性の観点からすれば、青年の危機は青年に関わる大人にとっても危機なのであり、どちらの方がより危機的であるか、などという問い自体が意味をなさないということになろう。Eriksonは確かに青年期が危機的な時期であることを強調したが、同時にまた、青年期は他の時期よりも危機的だというような単純な青年期中心主義的な主張を越えた次元にも開かれていたと言えるだろう。

## 文 献

- Ames,L.B.,Mettaux,R.W.,Walker,R.N. (1971) Adolescent Rorschach response.Brunner/Mazel.
- Archer,S.L.(1989) The status of identity : Reflections on the need for intervention. Journal of Adolescence, 12, pp.345-359.
- Archer,S.L.&Waterman,A.S.(1990) Varieties of identity diffusions and foreclosures: An exploration of subcategories of the identity statuses. Journal of Adolescent Research, 5(1),pp.96-111.
- Blos, P.(1962) On adolescence. Free Press. 野島栄司訳(1971) 青年期の精神医学 誠信書房
- Berzonsky,M.D. (1985) Diffusion within Marcia's identity-status paradigm : Does it foreshadow academic problems? Journal of Youth and Adolescence,14,527-538.
- Douvan,E.&Adelson,J. (1966) The adolescent experience. John Wiley.
- Freud,A (1958) Adolescence. Psychoanalytic Study of the Child,13,255-278.
- Hall,G.S. (1904) : Adolescence. vol.I,II. Appleton 元良勇次郎・中島力造・速水渙・青木宗太郎訳 (1910) 青年期の研究 同文館.
- Herz,M.R. (1960) The Rorschach in adolescence. Rabin,A.I.&Haworth, M.R.(eds.) Projective techniques with children. Grune and Statton. pp.29-60.
- 河合隼雄 (1994) 青春の夢と遊び 岩波書店
- Kretschmer,E(1949) Psychotherapeutische Studien. G. Thieme, Stuttgart,1949. 新海安彦訳 (1965) 精神療法 岩崎書店
- Kroger,J. (1995) The differentiation of "firm" and "developmental" foreclosure identity statuses : A longitudinal study. Journal of Adolescent Research, 10,3,317-337.
- Marcia,J.E. (1966) Development and validation of ego-identity status. Journal of Personality and Social Psychology, 3(5),pp.551-558.
- Marcia,J.E. (1976) Identity six years after : A follow-up study. Journal of Youth and Adolescence, 5(2),pp.145-160.
- Mead, M (1928) Coming of age in Samoa. William Morrow. 畑中幸子・山本真鳥訳(1976) サモア

の思春期 蒼木書房

- 宮下一博・田辺敏明・小柳晴生・岡本祐子・上地雄一郎・磯部修一・沢田章子・森川早苗(1984)  
外国（ことに米国）における同一性研究の展望 鐘幹八郎・山本力・宮下一博編 自我同一性  
研究の展望ナカニシヤ出版 pp.99-227
- 村瀬孝雄（1976）青年期危機概念をめぐる実証的考察 笠原嘉・清水将之・伊藤克彦編 青年の精  
神病理 1 弘文堂 pp.29-52.
- 無籐清子（1979）「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性教育心理学研究  
27(3),pp.178-187.
- 西平直喜（1988）青年心理学研究の当面する課題 西平直喜・久世敏雄編 青年心理学ハンド  
ブック 福村出版 pp.1-42.
- Offer,D.（1969）The psychological world of the teenager-A study of normal adolescent boys.  
Basic Books.
- Offer,D&Offer,J. (1975) From teenager to young adulthood. Basic Books.
- 清水将之（1976）精神病理学から見た青年の危機 笠原嘉・清水将之・伊藤克彦編 青年の  
精神病理 1 弘文堂 pp.53-70.
- 杉原保史（1988）自我同一性地位における早期完了型について――事例に基づく考察 心理  
臨床学研究 5 (2),pp.33-42
- 鐘幹八郎（1988）青年の同一性（アイデンティティ） 西平直喜・久世敏雄編 青年心理学  
ハンドブック 福村出版 pp.257-279.